



DRAMA かながわ No. 87

Theater Association of Kanagawa December 2022

TAK in KAAT 「YOKOHAMA 3 PIECES」

令和4年度神奈川県演劇フェスティバル／劇団探訪
2022年度神奈川県演劇連盟合同公演情報
第20回かながわ演劇博覧会に向けて ほか



TAK in KAAT

『YOKOHAMA 3 PIECES』

2022年10月13日～16日 KAAT神奈川芸術劇場 大スタジオ



【総評】 文：中山朋文 (theater 045 syndicate)

本年度2回目のTAK in KAAT は神奈川県演劇連盟に加盟する三団体によるオムニバス公演でありました。参加したのはいずれも横浜市内で精力的に活動している団体。

かつてTAK in KAAT で、今回のように複数団体が短編を上演する「Pinky」という公演がありました。その公演では「ラブホテルの一室」という共通のテーマに基づいて各団体が作品を出し合うという企画でしたが、今回は共通するテーマもなく、各団体がこれぞという作品を持ち込んでの上演でした。

共通のテーマがないことが功を奏し、全くテイストの異なる3つの作品が並ぶこととなりました。日本最後の朱鷺について事実に基づいた心温まる作品「サイゴノトキ」、「12人の怒れる男」をベースにしたディスカッションドラマ「職員会議」、名古屋の劇団オイスターズの作家・平塚直隆氏の作品「音～2022～」。

20代を中心とした虹の素、現役高校生から60代まで幅広い年齢層が一つの作品に取り組んだG/9-Project、ベテランと若手が共に汗を流すコメディを上演したtheater 045 syndicate。多様な世代による多彩な作品がそろったショーケース公演となり、お客様からも大変な好評をいただきました。

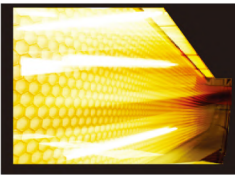
ここ数年は半席分空けたパイプ椅子を使用していましたが、今回は以前のベンチシートに戻り間隔を空けずにお座りいただけるようになりました。しかしコロナ禍が落ち着

きを見せ始めたとはいえ、やはり夜間の外出や県をまたいでの移動をためられる方も多く、観客動員数は苦戦しました。

そこで感じたのが、地元神奈川のお客様の大切さです。いつ終わるか分からないコロナ禍で、地元の演劇を支えるのはやはり地元の観客なのだとすることを改めて実感いたしました。神奈川県演劇連盟の諸先輩方の努力で獲得したこのTAK in KAAT という枠は、加盟団体の作品をより多くのお客様に観ていただくことができる事業です。更なる良質な作品を発表することが、地元のお客様を増やすことにつながると感じております。

『YOKOHAMA 3 PIECES』は様々な世代、様々なキャリアを持った演劇人たちの交流を生み出し、技術や人材が代謝していくための場としても機能していたことは大きな収穫でした。こうした交流こそが、県内の演劇シーンの活性化につながる源流になると確信しております。





劇評

TAK in KAAT「YOKOHAMA 3 PIECES」

文：本郷湊（劇団砂からマカロン）

今回の公演はTAK加盟三団体によるオムニバス形式。これは各団体の芝居だけでなく、全体を通してのバランスも重要になるがそれが非常に良かった。圧倒的な表現力でお客様の心を掴み、小劇場らしさ全開のテンポの良い舞台を見せ、疲れる頃にそれを吹き飛ばす笑いで締める。この順番が完璧だった。

■虹の素「サイゴノトキ」

主軸となるキンの動作がとても綺麗で目を引いた。立ち姿、飛ぶ姿勢、食事の様子、全ての所作が美しく、日本を代表するトキとして抜群だった。どの役者も芝居の熱量が高く、生きることへの希望も絶望も、どれも全力で生命力が伝わってきた。

キンが保護されてたった一羽で過ごす日々の描写が非常に繊細で美しかった。全く動かないキンと、その複雑な心境を映し出す様々な照明。唯一聞こえるのは掃除の音。その虚しさに心を打たれた。

ただ、それゆえに途中で挟まるコメディ描写がノイズに感じられた。折角自由を失ったトキの苦しみに心が寄り添っていたのに、そこで急に突き放されてしまった。そこからまたシリアスにいきなり戻るため、こちらまで情緒不安定になる。

今作の脚本はトキ視点で進むため、トキを保護し、繁殖させようとしている人間が完全に悪として描かれていた。しかし、我々は当事者でないため、そこで立ち止まって考える必要がある。保護し、絶滅から守るという行動は別に悪ではないと思う。現在の動物園と考え方自体は同じだと思うからだ。今回の舞台では多角的な視点が入っていなかったため、ここで一度様々な角度から物事を見ることの大切さが感じられた。

■G/9-Project「職員会議」

つい二分前までシリアスで空気の重い作品が上演されていただけに、雰囲気や軽さで心が救われた。話の内容は、問題児を退学させるかどうかというもののだが、濃いキャラクターによってコメディ色が強くなり見やすかった。

教室の窓を割った真犯人を先生たちで考えるというミステリー要素も入った作品なので、見ながらこちらでも推理をすることができて楽しい。また、登場人物が全員大人であることで、大きく話が外れてもしっかり冷静な会議に引き戻してくれる役割がいて中だるみもなかった。

会議中という、動きが少なくなってしまう状況でも派手に動くキャラクターが違和感なく生きていた。場の空気も変わるし、話がどんどん展開して行って飽きない。言動だけ見れば子どもなのだが、ちゃんとした大人の役者が演じることで子どものように可愛らしい大人として昇華されていた。

また、先生たちによるギャグが多かったのだが、それがどれも絶妙だった。それによって重要なセリフがかき消されることもなければ、ギャグがはっきり聞こえたときにふふっと笑みがこぼれるような場面もあった。作品の邪魔をしない完璧な加減だった。

しかし、この作品は本来もっと長いものを今回の企画用に短くしたものである。そのため、もっとここから畳みかけてほしいというときに収束に向かってしまった。これはぜひフル尺で観たいし観てほしい。

■theater 045 syndicate「音～2022～」

最後は三劇団の中でもトップクラスの熱量でコント（と私は思ったもの）を見せてくれた。

まず、明らかに高校生に見えない役者が青春コントのようなテンションで男子高生を演じていることの滑稽さにやられた。元女子校に釣られて入学したのに女子に会ったことがない男子という設定も面白い。登場する男子生徒は全員ハイテンションで、千秋楽ということもあってか喉がトんでいたように思えた。だが、その必死さが逆に面白い。

女子に会いたい四人の男子と、それに巻き込まれる先生という図がずっと続くのかと思いきや、途中で現れる納品業者によってまた面白さが変わった。業者の対応がしたい先生と、それを止める生徒。そして放置される納品業者。生徒たちが騒げば騒ぐほど、静と動の対比で面白くなる。

ここまで話の大きな展開はないのだが、急に現れた転校生により事態は一変し合唱部になるのだ。もうとにかくめちゃくちゃだが、私はコントだと思っているので整合性などどうでもよくなっている。

最後には合唱があるのだが、これがまた奇妙なのだ。七人で七音を一つずつ分担するという謎のシステムである。おそらくどの会話よりもこの練習に時間を費やしたことであろう。そして、これがまた終わったときに謎の感動を呼ぶのだ。劇中にも関わらず客席からは大きな拍手が巻き起こる。

正直、この話は別に、いわゆる良い話ではない。だが、最後まで見たときに何か「イイハナシダナー」と脳が勝手に思ってしまった。アホも突き抜ければ天才ということなのだろう。圧倒的なエネルギーにはどんな技術もひれ伏すのだ。

三者三様で見応えたっぷりの芝居を観ることができた。あっという間に過ぎる時間。終わってからの満足感も申し分ない。素直に全て面白かったと言える。演劇に対する考え方の幅も広がった。この凄まじさをこれからの演劇業界に少しでも伝播させることが、神奈川県演劇連盟にいる者としての私の使命なのだろう。

令和4年度 神奈川県演劇フェスティバル 劇評

虹の素「銀河旋律」

2022年9月3日～4日 STスポット横浜



何の予備知識も持たずに席に着き、好感の持てる舞台中央のセットを眺めているうちに、キャラメルボックスの戯曲「銀河旋律」だと気付いた。会場もセットも小劇場で丁度良い感じ。

タイムマシンが実用化された時代。柿本キャスターが司会を務める「ニュースプラネット」の本番中、目眩に襲われる。タイムトラベラーによって過去が改変された人間は目眩に襲われるのだ。柿本と恋人はるかとの出会いの過去を変え、自分の思いを遂げようとするサルマルに立ち向かう。。。ああ、懐かしい。エンターテイメント・ファンタジーの始まりだ！

この本は、当時45分芝居のハーフタイムシアターと云われた作品の一つ。短時間に現代と過去を行き交い忙しく展開していくのだが、其処は劇団虹の素らしくバンバンと勢いよく話は進む。そして柿本役は兎に角、熱い！愛を全うする男の熱演を観た！片やサルマルは、クールだが眼力強く相反する。

緊張が続くタイムトラベルの話の中で、女子高校生役3人が個性も楽しく所々で緩和してくれるのが丁度良い。この女子高校生が口火を切って所々で万葉集の恋の歌が詠まれるが、手紙を書くことも希少になった昨今、万葉集の存在は若い人たちにどのように映るのか、年配者としては気になるところ。そして彼女達は音楽部だが、卒業時に万葉集を音楽にして歌ったと云うことで話題になる。『絵や文字と違いレコードなどが発明される迄は音楽は歴史に残らなかったが、心が変わらない限り心に残る』と云う、顧問のはるかの台詞は難しかっただろう。

幾多のトラブルで恋人達の行く末が不安になるも脚本の言葉は優しい。『会うのは今日が初めてだけど、ずっとずっと好きでした。』『誰かが私を待っているような気がして。待っていたんです、もっとずっと前から。あなたに会うために』こんな照れ臭い台詞を情熱を持って役者は喋りハッピーエンドを予感させる。

30年程前に書かれた本だが虹の素にぴったりだと思った。若い彼らだからこそ、純粹だったり熱かったりする登場人物を真っ直ぐに演じ、照れ臭いセリフも真っ直ぐに喋る。最後のカーテンコールで、若い劇団員をサポートするこのステップ公演に於いてサルマルを演じながら演出された宮本氏を始め、其れ其れの清々しい顔が印象的だった。

文：川井眞理子（まりこ☆みゅーじあむ）

劇団蒼い群「さよならパーティ」

2022年11月12日～13日 横須賀市立青少年会館3Fホール

創立50周年記念大感謝祭と銘打っての公演であり、若くして逝去した劇団員の追悼公演としての舞台であった。蒼い群は、横須賀演劇界では河童座と並んで歴史のある劇団であるが、私は観劇するのは実は初めて。同劇団の中心的存在である村田次郎さんとは、県演連の合同公演はじめいろいろなご縁があり、それが今回足を運んだきっかけにもなった。

さて舞台である。今回は66回目の公演ということからほぼ毎年1～2本の作品を創っていることになる。まさに継続は力なり。出演者はほぼ高齢者集団（失礼！）。受付スタッフは若い人が多く、場面転換でも黒子役を務めていた。若い皆さんが、役者たちさらには舞台づくりを支えている印象。とてもいい感じだった。もうひとつ、お客様をしっかりと把握しているということ。公演後の舞台挨拶で、動員260名と発表されていたが、なかなかのものではないか。お客様もやはり平均年齢はかなり高いのだが、一方で若い観客の姿もかなり見ることができた。動員力は内容的な解釈と表現など、芝居の成功とは別に評価に結びつく重要なファクターであり、この点では蒼い群はいい成果を出している。

今回作品は、17年ぶりの再演だそうだが、テーマとしては時代を反映して古さを感じさせないものだった。逆に言えば、高齢者にとっての未来とは？そこにどんな希望を見出せるのか、あるいは失望が見えてくるのか、不変のテーマなのだろう。

高齢の男女が集まりなんと集団自殺を決行する相談をしている。取り纏め役の女性が入手した木の実を用いれば、何の痛みも苦しみもなく死ぬのだという。この趣旨に賛同した高齢の男女が集ってきたという次第。ところがその中の一人が、死にたがる妻の真意を測りかね、付いてきたところからさまざまな葛藤が展開する。

役者として皆さんの力量は決して高いとは言えないし、台詞が客席までしっかり届いていない方もいた、特定の仕草が抜けない役者さんもいる。しかし、そんなことはほぼ気にならないくらい楽しい芝居だった。

文：吉浜直樹（劇団横濱にゆうくりあ）



京浜協同劇団「正直・清兵衛／米屋はまだ無事か」

2022年11月19日～27日 スペース京浜



老舗である京浜協同劇団は、60年以上の歴史を持っている。南部線沿線の鹿島田駅から徒歩15分ほどの住宅街の一角に立派な稽古場兼アトリエを運営しており、公演場所の確保に四苦八苦している我々のような小さな劇団にとっては羨ましい限り。数えて96回目となる今回の公演もこのアトリエを舞台としている。とりわけ客席は階段構造としてしっかり見やすさを実現している。平舞台にして客席からは見下ろしになるので見やすい。そして舞台天井には明かりもしっかり吊りこんであって、ちゃんとした演劇空間となっているのはさすが。

さて、作品である。京浜協同のレパートリーでもある奮物と現代劇の二本立て。昔は町の映画館はどこでもそうだったが、その記憶に呼びかけるような、なんだか懐かしい二本立てという言葉の響きだ。はじめに「米屋はまだ無事か」という朗読劇。2011年のあの大震災での津波から避難する人々の葛藤と生き様をテーマに据えた。しかし深刻な匂いはしてこない。むしろ明るい楽しい作品になっているのいい。それでいて襲い来る自然の猛威の怖さは伝わってくる。朗読劇なので、台本を手にして基本は言葉だけで動きなどは最小限にとどめているのだが、決して省略ではない。一人一人の役が生きている。とりわけ都会から米屋に憧れて彼の地に移り住んできた主人公たる青年の味がいい。なんだかほんのりと明るい。生き延びて希望につなげる役割を果たしている。

二本目の「正直・清兵衛」は、お馴染みの古典落語「井戸の茶碗」が題材。話しの展開は皆さん先刻ご承知であろうが、それがどんな芝居になるのか。登場人物が全員正直者ばかりで、こうすりゃあ得だなあなんて誰も思わない。こんな風に正直者ばかりで欲がなければ、世知辛い世の中がどれだけ居心地がよくなるのか。政治家とか企業家とか権力の中核にいる輩に見せてやりてえ。そんな言葉が頭の中をよぎった。落語を芝居に仕立てるためには、空間設計や役に合わせた演技も必要となる。そこは上手と下手を対象となる武家（両方とも奢らず甲乙つけがたい正直者）の空間を置いて、その間をこれまた正直者の屑屋の清兵衛が行ったり来たりして話しが展開していく。シンプルでわかりやすい。とはいえ、つなぎに長屋の住民の交流を挟んだりして変化もつけている。途中、若干名の役者さんに台詞が怪しげだったりする瞬間があったが、それはまあご愛敬か。共演の若手が何とかつなごうと助け船を出しているのが微笑ましかった。

文：吉浜直樹（劇団横濱にゆうくりあ）

劇団河童座「オズの魔法使い」

2022年12月10日～11日 横須賀市立青少年会館3Fホール

劇団河童座が創立以来続けてきた「家庭劇場」は、子供たちと母親、父親、さらには家族、近所の人たちなど、大人たちも一緒になって楽しめる芝居を！というコンセプトでシリーズ化してきたものである。本来は8月に打つ公演であったが、リベンジ公演（つまりはコロナウィルスによる中止に対する）と位置づけられた「オズの魔法使い」は12月に上演されたのだ。

上演前の出演者たちによる手と足を使っての遊びは、客席を巻き込んでのものであり、まさにファミリアスな舞台となることを予感させていた。

さて、出し物の「オズの魔法使い」は今から122年前の1900年にライマン・フランク・ボームが書き上げた児童文学作品であるが、ファンタジーであり、ヒューマンであり、しかも分かりやすいということでメガヒットを記録した。アメリカのカンザス州の農場に暮らす少女ドロシーが竜巻に家ごと巻き込まれて飼い犬のトトとともに不思議なオズの国へと飛ばされてしまう話である。

頭脳と心、そして勇気を手に入れたいと言う案山子、ブリキのきこり、ライオンの願いを叶えるために、ドロシーが魔法使いに助けを求めに行く。ラストは、本当に大切なのは家族を思う心、仲間を信じていく心だ！という物語に行き着くのだ。「オズの魔法使い」はブロードウェイのミュージカルにもなり、映画ではジュディ・ガーランドが子役を演じて絶賛を取り、その主題歌「Over The Rainbow」は、それこそアメリカ人なら誰でも歌えると言うほどの受けをとった。

河童座の作りとしては、プロセニウム舞台とその下の前舞台をうまく使いまわして客席との一体感を出していた。呪文を唱える時の「何でもかんでもへのカッパ（河童）」というセリフには、洒落と自虐的な笑いが込められていたので、これには参った。

そして客席の反応は素晴らしく、とりわけ案山子役の長谷川純子さんの芝居には子どもたちが大笑いしていた。主役ドロシーを演じた飯塚妃菜さんもキュートな魅力を振りまいていた。

それにしても河童座の公演数は実に237回を数え、もしかしたら日本一の数というのは驚き以外の何ものでもない。創立して70年であるが「継続は力なり」であり、これからもさらなる奮闘努力を期待したい。

文：泉谷渉（劇団横濱にゆうくりあ）



■劇団紹介

【団体名】ヨルノハテの劇場

【代表】岡島哲也

【設立】2018年12月

【神奈川県演劇連盟加盟】2022年



プロデュース型の演劇ユニットで、作品ごとに出演者・スタッフを集めて公演を行ないレパトリー化できる普遍的な作品を目指しています。2018年に若葉町ウォーフで上演したオトノハ「はまべのうた」をきっかけに旗揚げしました。

「はまべのうた」は山崎薫さんの女優と歌手の二つの魅力を手がかりに、人形を使った一人芝居を行っています。他には代表：岡島の構成・演出による「外套」という作品や、2021年には「*シリーズ町の灯り*」と題して、井上ひさしさんの「芭蕉通夜舟」や太田省吾さんの「棲家」を作品化してきました。

■劇団名の由来

作家：ルイ＝フェルディナン・セリーヌが1932年に発表した小説「夜の果ての旅」からとりました。

セリーヌは「呪われた作家」と呼ばれており、この作品も「読んではいけない小説」と言われていたりするのですが、一人の男の半生を描いた作品が好きなのと「ヨルノハテ」という響きが気に入ったためこの劇団名にしました。

■神奈川県演劇連盟との共有

岡島は横浜の中区にある「若葉町ウォーフ」という民間アートセンターでも活動しています。この施設は1階に劇場、2階にスタジオ、3階にドミトリー式の宿があり、自由な発想による作品創造と人々の出会いの場を提供しています。

近隣アジアの諸都市で活動をつづける舞台芸術家をはじめ、ジャンルを越えたクリエイターたちの出会いとものづくりの場所として豊かな時間を紡いでいきたいと考えています。神奈川県演劇連盟の多くの皆さんとも共有できたらと思っています。

■公演情報

下北沢の本多劇場で、初のキッズプログラム「オオカミだ！」を上演します。

パントマイム・アーティスト「が～まるちょぼ」の元メンバーであるケッチさんが一人で演じるノンバーバル作品です。

演出には横浜で活躍する劇団唐ゼミ☆の中野敦之さんを迎えます。彼は文化庁の海外研修で今年一年間イギリスに行っており、帰国後初の演出作品となります。

ケッチさんと中野さん、この二人のコラボに期待しています。おとぎ話「三匹の子豚」を題材にした大人も楽しめる作品を目指しており、海外上演も視野に入れたレパトリー作品に仕上げたいと考えています。

第33回下北沢演劇祭参加作品

「オオカミだ！ - 『3びきのこぶた』に出てくるオレの話 -」

開催日 2023年2月17日(金)～19日(日)

会場 下北沢・本多劇場

出演 ケッチ

演出 中野敦之

企画製作 ヨルノハテの劇場

主催 合同会社ヨルノハテ

詳細ページ

<http://yorunohate.net/the-big-bad-wolf/>



■最後にひとこと

ユニットという特性を活かして、今後もフットワークは軽く、普遍的な作品を手がけていきたいと思っています。また今年度は東京での公演が多かったのですが、今後は横浜で作った作品で旅公演をしていきたいと考えています。どうぞよろしくお願い致します。



2022年度神奈川県演劇連盟合同公演情報

■取材：オッスたかのり（劇団かに座）

神奈川県演劇連盟（以下：TAK）の合同公演の季節がやってきました。サッカーW杯で日本代表の活躍に沸く12月某日、その勢いに負けないくらい活気溢れる稽古場で、総合プロデューサー：仲尾玲二氏（G/9-Project）、脚本：福本ふう之介氏（プラスティックな月）、そして2022年度の芝居塾塾生から大西真愛さん・丑田穂香さんにお話を聞きました。



ー今回の合同公演の見どころを教えてください

仲尾：福本氏と組んで三作目となる今回、20名を超える多くのキャストが集まりました。例年使用している紅葉坂ホールが改修工事のため今回はスタジオHIKARIが会場となりますが、熱量を伝えるにはとても良い環境だと思っています。

ー作品はどんな内容なんですか？

福本：江戸時代の後期に曲亭馬琴が著した「南総里見八犬伝」と、三遊亭圓朝の創作落語「文七元結」を融合した作品となります。「文七元結」に登場する左官の長兵衛は無類の博打好きのため借金を抱え、馬琴がその肩代わりをするということにして、馬琴が八犬伝を書くまでの話にしたらどうだろうか。仲尾氏とこんな会話をしたのが作品を執筆するキッカケとなりました。

ーなぜ八犬伝をやろうと？

仲尾：前々回の合同公演はシェイクスピア「オセロ」を題材に、前回は「西遊記」を。洋・中ときたら今度は「和」かなと（一同笑）。過去の参加者の中からも「八犬伝やってみたいね」と話が出て、これだ！と決めました。

ーということは、今回も殺陣ありますか？

仲尾：はい、あります。「SKG42 Kチーム」に殺陣の振り付けをお願いしているので、本格的な殺陣も楽しみにしてください。



ー今年度の芝居塾塾生から2名の参加がありますね

大西：TAKの懇親会にたまたま参加した際、合同公演の話題が出て「やりたい！」と強く感じたのがキッカケとなりました。

丑田：今年度の芝居塾は残念ながら開催することが出来ませんでした。今後も演劇に関わりたい思いがあり参加を決めました。

ー稽古に参加してみてくださいか？

大西：年齢層がとても幅広いのですが、コミュニケーションが取りやすくとても楽しいです。そういう雰囲気を作ってくれているプロデューサーのお陰です（一同笑）。

丑田：最初はとても緊張しました。でも参加者の皆様がとても優しく、毎回楽しく勉強させて頂いています。

ー最後にひとことを

仲尾：TAKのイベントの中でも合同公演はお祭り要素が大きいと思っています。演じる側も観る側も楽しくなる作品にしますので、ぜひご来場ください！

2022年度神奈川県演劇連盟合同公演「南総里見八犬伝傳」

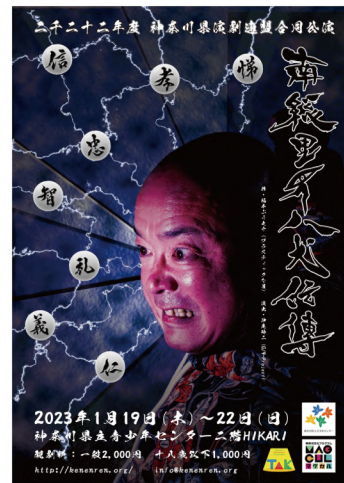
開催日 2023年1月19日(木)19:00、20日(金)19:00、
21日(土)14:00/18:00、22日(日)14:00

会場 神奈川県立青少年センター2階 スタジオHIKARI

入場料 一般2,000円、18歳以下1,000円

チケット予約・購入ページ

<https://www.g9-project.com/tak2022denden>



第20回かながわ演劇博覧会に向けて

神奈川県演劇連盟が主催する演劇の祭典「かながわ演劇博覧会（通称：演博、えんぱく）」は、神奈川県下で活動する劇団や演劇団体が集まり小作品を連続上演してゆく催しです。「演劇の敷居を低くして、普段芝居を観ない人々に芝居を観てもらおう」を合言葉に始まりました。

節目となる第20回を迎える今回は、過去最多となる総勢14団体が参加することとなりました。入場は無料。そして投げ銭制度ももちろんあります。

公演に向けて各団体は日夜稽古に励んでおります。年度末に行われる熱いイベント。皆様のご来場お待ちしております。

■出演予定団体（50音順）

MMTパントマイム	演劇企画ケモノの庭園
演劇企画ティータイム	劇団おらんだ
劇団カレーライス	劇団さめと放課後。
劇団Salon de 自由席	劇団年輪
劇団「無題」	Ghost Note Theater
チリアクターズ	独騎の会
まりこ☆みゅーじあむ	ヤニーズ

■第20回かながわ演劇博覧会

開催日 2023年3月17日(金)、18日(土)、19日(日)

会場 神奈川県立青少年センター2階 スタジオHIKARI

※各団体の演目、出演日時につきましては、神奈川県演劇連盟のホームページでご確認ください。



演劇資料室

【開室時間】

平日（火曜～金曜） 13:00～22:00（貸出は21:30まで）

土曜・日曜・祝日（月曜以外）10:00～22:00（貸出は21:30まで）

【休室日】

月曜、年末年始

※上記以外にも休室日がございます。ホームページをご確認の上、お越しく下さい。

〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-1 神奈川県立青少年センター2階 演劇資料室 電話：045-286-4485

今後の事業・公演予定

■劇団砂からマカロン『こんなシェアハウスはいかがですか？～安形賢の混沌～』2023/1/13～15、神奈川県立青少年センター・スタジオHIKARI

■2022年度神奈川県演劇連盟合同公演『南総里見八犬伝』2023/1/19～22、神奈川県立青少年センター・スタジオHIKARI

■ヨルノハテの劇場『オオカミだ！～『3びきのこぶた』に出てくるオレの話～』2023/2/17～19、下北沢・本多劇場

■劇団こゆるぎ座『日本開国哀話「唐人お吉」』2023/2/25～26、小田原三の丸ホール・大ホール

■第20回かながわ演劇博覧会 2023/3/17～19、神奈川県立青少年センター・スタジオHIKARI

神奈川県演劇連盟加盟団体（50音順）

■演劇プロデュース『螺旋階段』 ■京浜協同劇団 ■劇団蒼い群 ■劇団河童座 ■劇団こゆるぎ座

■劇団砂からマカロン ■劇団820製作所 ■劇団「無題」 ■劇団横濱にゅうくりあ ■theater 045 syndicate

■G/9-Project ■虹の素 ■プラスチックな月 ■マシュマロ・ウェーブ ■まりこ☆みゅーじあむ

■MPinK(ミュージカルプロジェクト in 神奈川) ■横浜小劇場(横浜演劇研究所附属) ■ヨルノハテの劇場

DRAMAかながわ 87号

[発行] 神奈川県演劇連盟（2022年12月31日）

[編集] オッサたかのり(劇団かに座)、吉浜直樹(劇団横濱にゅうくりあ)、穂村一彦(劇団「無題」)、

緑慎一郎(演劇プロデュース『螺旋階段』)、野比隆彦、波田野淳紘(劇団820製作所)、

中山朋文(theater 045 syndicate)

[ホームページ] <http://kenenren.org/>

